

林田 菜緒美

株式会社リンデン 代表取締役

看多機の開設や共生型サービス導入で、 在宅ケアの限界点を越える



林田 菜緒美

Naomi Hayashida

株式会社リンデン 代表取締役

1985年、活水女子短期大学卒業。1985年、RKB 毎日放送へ入社。1997年、東京都立松沢看護専門学校卒業。緑協和病院に3年間、麻生総合病院に3年間勤務し、2004年、訪問看護ステーションばかばか勤務。2011年、訪問看護ステーションゆらりん開所。2013年、看護小規模多機能型居宅介護ナーシングホームゆらりん開所。2014年、居宅支援センターゆらりん、ヘルパーステーションゆらりん開所。2016年、児童発達支援・放課後等デイサービス・生活介護 KIDS ゆらりん開所。2017年、看多機居宅介護サテライトゆらりん家開所。2023年、定期巡回・随時対応型訪問介護看護巡回ゆらりん開所。2019年度・川崎市「小地域における生活支援体制整備事業」受託。

推薦者 清水 嘉与子 公益財団法人日本訪問看護財団理事
福井 トシ子 国際医療福祉大学大学院 副大学院長

地域にないものは作るしかない

2011年に、訪問看護ステーション「ゆらりん」を開設した林田氏。利用者の中に、吸引や経管栄養などが必要な難病のご家族を自宅で看ていた方がいた。遠方の親族に不幸があったとき、医療処置が必要な人を預かってくれる所がないため葬儀に行けなかったのだという。「訪問看護で何時間も1~2時間の“点”でしかない。“面”で支えられるようなものはないか」と、探していた時に見つけたのが看護小規模多機能型居宅介護(以下、看多機)だ。

看多機とは、訪問看護、訪問介護に加え、通いや泊まりを組み合わせることで、医療依存度の高い方にも柔軟に対応できる複合型サービスのこと。2013年に市内初となる、看多機「ナーシングホームゆらりん」を開設する。通いや宿泊の際に人工呼吸器などの医療処置が必要な方や、急に泊まり先の確保が必要な方などに利用されている。こうしたニーズに対応できるのは、1つの事業所が4つのサービスを包括的に提供できるからに他ならない。

医療依存度の高い人に対して在宅ケアの限界点を上げるために始めた看多機だったが、一方で「自宅の近くだから安心」という理由で、身体的には元気な認知症の登録者も増えていた。手狭になったため、500メートルほど離れた場所にサテライトとして、居宅介護サービス「ゆらりん家」を開設する。ここでは食事や



2019年に川崎市の事業を受託し、日曜日にはゆらりん家を地域に開放。健康体操やお弁当づくりなど、毎回お子さんからお年寄りまで90人ほどの参加者で賑わう。

入浴を楽しんでもらうなど、自立支援に力を入れている。サテライトには、医療ケアが必要な重症心身障がい児をケアする、児童発達支援・放課後等デイサービス・生活介護「KIDS ゆらりん」も併設されており、世代を超えた交流も生まれている。

何でも来い!ここで支え合おう

2017年度には介護保険法が改正され、介護保険サービス事業者が障害福祉サービスを提供しやすくなった。これを共生型サービスという。林田氏の看多機では、児童発達支援・放課後等デイサービスと生活介護で申請を済



ませているので、必要時は全年齢の障がい児・者の受け入れが可能となった。

30歳の時に看護の道を志す。看護専門学校の実習中、自宅で呼吸器を付けているお子さんとお母さんの姿を見て、訪問看護をやろうと心に決めたのだという。

ある時、地域包括支援センターからゴミ屋敷についての相談を受ける。訪ねてみると、80代くらいの認知症の母が、精神疾患のお子さんと二人で暮らしていた。親子はある種の依存関係にあるため、引き離すことはできない。そのため親御さんは看多機の登録者として、お子さんは共生型サービスの生活介護利用者として、同じ日に来所。一緒にご飯を食べたり、お風呂に入ったりしているという。これは林田氏の看多機が、共生型サービスの提供を行っているために可能になったケースである。

最近では障がい児をもつ親御さんから、「自分も高齢になるし、子どもをとる。どうしよう」と相談を受けるのだという。“地域にないものは作るしかない”と次々と在宅ケアの限界点を越えてきた林田氏。親子が一緒に住めるような施設を作りたいと語る。“何でも来い!”ここで支え合おうと、決意も新たに歩み続ける。

最近では障がい児をもつ親御さんから、「自分も高齢になるし、子どもをとる。どうしよう」と相談を受けるのだという。“地域にないものは作るしかない”と次々と在宅ケアの限界点を越えてきた林田氏。親子が一緒に住めるような施設を作りたいと語る。“何でも来い!”ここで支え合おうと、決意も新たに歩み続ける。